

スパルタの対ペルシア策

—クレオメネス一世の時代—

新村祐一郎

クレオメネス一世は紀元前五二〇年頃から約三〇年間スパルタを支配した王であるが、この時代は西アジアを中心とするペルシア帝国が西方への進出を始めた時期に当たっている。ペルシア帝国は前五五〇年頃建国されたが、前五四〇年頃には早くも小アジアを支配化においた。当時小アジアと盛に貿易を行っていたスパルタはこのペルシア帝国と接触したが、ペルシアが友好国として手を結ぶ国とはなり得ないことを察知し積極的には交渉を持たない方針をきめた。しかしながらペルシアの動向には常に敏感であり、当時のスパルタ王アナクサンドリダスはペルシア帝国の勢力がエーゲ海上に及ぶことを警戒し、制海権の保持に孜孜としていた。

クレオメネス一世の約三〇年に及ぶ治世は約一〇年づつ三期に分けて考えることができる。第一期は前五二一年までで前王の政策を継承しながらも、防衛の主眼を海から陸へ転じた時期であり、第二期は前四九九年までで対アテネ問題に集中していた時期に当り、第三期はそれ以降でペロポネソスの内部問題に没頭したかに見える時期である。

彼が即位した頃ペルシアはサモス島を占領してエーゲ海上へ進出し始めたので、クレオメネスは海から退いてギリシア本土の固めに転換した。ギリシア全土をスパルタ中心の同盟で結びつけようというのである。その目的を実現するためには、次第に強力と

なってくるアテネに親スパルタ政権を造らなければならず、しばしばアテネに対して内政干渉を試みている。彼はデルポイの託宣にも懲瀆されて、先ず当時のアテネの僭主政を倒そうと意図し、前五二一年にベイシストラティダイの僭主ヒッピアスを追放するのに成功した。さらにその後の政権争にも介入し、アテネの貴族多数に支持されていたイサゴラスと民衆派と目されていたクレイステネス（名家アルクメオニダイ出身）との二人のうち、イサゴラスを支持して彼を政権の座につけようとした。しかし結局イサゴラスはスパルタ軍とともにアテネから退去し、そのあとアテネの民会でクレイステネスの民主政を目指す改革案が採択されたため、事実上スパルタと敵対することになり、アテネは対抗上ペルシア帝国との同盟を考えている。けれども、もしアテネとペルシアとの同盟が成立すれば、クレオメネスにとっては自らの意図が根底から覆されることになるので棄ておけず、前五〇六年にイサゴラス政権を樹立する目的で若干の同盟国と共にアッティカに侵入したが、同盟内部に意見の不一致があつて成功しなかつた。そこでクレオメネスはかつて自ら追放したヒッピアスを呼びもどして、アテネの支配者に復位させようとした。そもそも、スパルタの王家はベイシストラティダイと親密な関係にあったのに、あえてヒッピアスを追放したのはデルポイの託宣があつたからであるところがある。ところがその託宣が実はアルクメオニダイの陰謀であつたことが明らかになつたので、ヒッピアスを呼びもどし事実上スパルタの傀儡政権をアテネに樹立しようとしたのである。しかしこれも同盟諸国の同意が得られず不調に終つた。そのうちヒッピアスはペルシアの宮廷に接近し、ペルシアの力を利用して復位をねらうようになったのでクレオメネスもヒッピアスの起用を諦めて

いる。しかしながらクレオメネスはあくまで親ペルシア反スパルタ的な態度をとるクレイステネスをアテネの指導的地位から退かせることを目指している。ところが改革が断行されたのちのクレイステネスの行動は全く知られていない。ヘロドトスもアリストテレス(『アテネ人の国制』)もそれについては何も語っていない。前六世紀末のアテネ政界からクレイステネスの名は全く消えている。少なくとも前六一五世紀の転換期に彼と一族(アルクメオニダイ)が主導権を握っていかなかったことは否定できない。これは如何なる事情によるのか詳細は不明であるが、要するにクレイステネスの反対派が勢力を得たことは明らかである。そしてこの間スパルタはアテネに干渉していない。

前四九九年いわゆるイオニア反乱が起った際、ミレトスの独裁者アリスタゴラスはこのペルシア王に対する反乱にギリシア本土の援助を求めようと策した。そこで彼はまずスパルタに協力を要請したが、クレオメネスはこれを拒否したので彼はついでアテネに向った。アテネではその当時親ペルシア的な立場を取る党派が二派あった。その一はベイシストラティダイを中心とするものでこれはヒッピアスの親ペルシア的な態度に応じたものであり、他はアルクメオニダイを中心とするもので同派の親ペルシア的な外交方針にもとづくものであった。したがってこの二派はペルシアと対決する反乱を支持し援助するには消極的な態度であった筈である。これに対して積極的に反乱の援助を主張したのはかつての貴族派でベイシストラティダイともアルクメオニダイとも対立していた親スパルタのイサゴラス支持派であった。結局アテネではアリスタゴラスの説得が効を奏したのかイオニア反乱援助の方針が打ち出され、軍艦二〇隻が出動している。しかし前四九七年

のエベソスの敗戦後アテネ軍はひきあげ、そののちは要請されても援助しなかった。このことはアテネにおいて援軍派遣を主張する声が圧倒的多数ではなかったことを示している。

しかしながら以上の行動によって外交的にはアテネとペルシアとが敵対関係に突入したわけである。スパルタ王クレオメネス一世はアテネがペルシアとの対立関係を明確にしたため、これまでの対アテネ政策を断念した。彼は常にペルシアと対立する勢力とは交渉しないという基本方針を立てていたからである。この方針は前王アナクサンドリダスのそれを継承したものでない。アナクサンドリダスはエーゲ海の制海権に関心を持ちながらも、ペルシアとは何ら関係を持つことのないよう配慮している。クレオメネス一世の治世になってから間もなく、小アジア沿岸に近いサモス島がペルシアの手に落ち、また黒海方面を本拠地とするスキュタイア人もペルシアに征服された。その際ペルシアに攻められた側はスパルタに援助・協力を求めているが、スパルタはいずれの場合もこれを拒否している。さらに先に見たようにアリスタゴラスの援助要請を拒否しており、アテネが反ペルシアを明白にするのとこれと交渉を絶っている。以上のようにクレオメネスの対ペルシア政策は徹底した敬遠策だったといえないことはない。

対アテネ政策はしかしながらスパルタにとっては頭の痛い問題であった。アテネ側ではスパルタと提携してペルシアに対抗するか、ペルシアとの友好を保ってスパルタに対抗するかの二つの方策しか考えられていないが、そのいずれもがスパルタには好ましくなかったからである。そのためにこそスパルタはアテネに傀儡政権を樹立しようとしたのである。

ところでクレオメネス一世は対アテネ政策を放棄してから、も

つばらペロポネソス内部の体制固めを計り、隣国アルゴスを徹底的に破ってペロポネソスにおけるスパルタの覇権を一層確実なものにした。他方アテネでは前四九〇年代の中頃にペイシストラテイダイのものがアルコンに就任するなど親ペルシアの傾向を示し、ペルシアとの関係改善を望んでいるような様子が見えるが、前四九二年にミルティアデスがアテネの將軍職についた頃から親ペルシア派の勢力がやや弱まり、逆に親スパルタに傾斜したようである。しかしながらマラトンの戦い（前四九〇年）の直前まで対ペルシア交戦論と和睦論とがアテネでは相半ばしていたから、親ペルシア論者も決して少なくはなかったのである。

クレオメネス一世はすでにマラトンの戦いの時には全く政治的な力を失っていた。彼はアイギナへの干渉を有利に展開するため僚王ダマラトスを退位させたが、その際の陰謀が発覚しようになったので本国から一度退去している。このことはスパルタ国内で反クレオメネスの空気がかなり強くなったことを示しているが、その主たる理由は彼の独裁的傾向が明らかになってきたことに對する危惧の念であろう。彼は退去したのちアルカディアで体制を整え、アルカディア人を率いてスパルタに攻め入る構えを見せたが、これは全く僭主の方法である。そこでスパルタ政府は彼を單身帰国させたが、すでに政治的な力はなく間もなく死去した。その頃マラトンの戦いが行われていたのである。

古来このクレオメネス一世の評価は芳しくない。彼の生涯はヘロドトスによって知られるが、ヘロドトス自身は彼の瀆神行為が度重なったこともあって好意的な態度をとってはいない。しかし近年の研究者は彼がギリシア内部の関係にのみ専念して国際関係

には意を用いぬ無能力者でそのためにペルシアの侵攻に対しても有効的な手段を構じ得なかつたと断している。だが果してそうであろうか。クレオメネスはアテネと協調してスパルタを中心とする同盟を結成し、ギリシアの覇権を握り外敵の侵入に対してもこの同盟で対応することを意図していた。クレオメネスがペルシアに對して徹底した敬遠策をとったのはペルシアの力を熟知していたので、ペルシアの関心をギリシアに向けさせない為と考えられる。したがって、事実上アテネがペルシアと交渉を持ち始めるとこれを阻止しようとしたが、アテネがペルシアとの対立を明確にするにペルシアのギリシア侵攻を予想してアテネとの協調を諦め、ペロポネソス半島へのペルシアの進入を防ぐ方策に転換した。そこでペルシアと交渉する可能性のあるアルゴスに壊滅的な打撃を与えて半島における覇権を確実なものとしたのである。ペルシアがペロポネソスを直接攻撃しない限りこれと対戦しないというのが前五世紀初頭以降のクレオメネスの態度であった。ペルシアがギリシアへの攻撃姿勢を強めていた時これに常に消極的な態度をとり続けたからこそ、ペルシア軍のペロポネソス侵入は最後まで回避されたのである。クレオメネス没後約一〇年にして結局ペルシアがギリシアに敗北したのはこのクレオメネス一世の態度によってギリシア人の余力が確保されたからである。その観点からするとクレオメネスはギリシア人にとっては救国の英雄ともいえるべき存在だったのである。

クレオメネス一世がペルシアとの交渉をしなかつたのは無知であつたためではなく、むしろ熟知していたためではないであろうか。